

# 1. テスト

ある日の暮方の事である。一人の下人（げにん）が、羅生門（らしょうもん）の下で雨やみを待っていた。

Code block test

広い門の下には、この男のほかには誰もいない。ただ、所々丹塗（にぬり）の剥（は）げた、大きな円柱（まるばしら）に、蟋蟀（きりぎりす）が一匹とまっている。羅生門が、朱雀大路（すざくおおじ）にある以上は、この男のほかにも、雨やみをする市女笠（いちめがさ）や揉烏帽子（もみえぼし）が、もう二三人はありそうなものである。それが、この男のほかには誰もいない。

何故かと云うと、この二三年、京都には、地震とか辻風（つじかぜ）とか火事とか饑饉とか云う災（わざわい）がつづいて起った。そこで洛中（らくちゅう）のさびれ方は一通りではない。旧記によると、仏像や仏具を打碎いて、その丹（に）がついたり、金銀の箔（はく）がついたりした木を、路ばたにつみ重ねて、薪（たきぎ）の料（しろ）に売っていたと云う事である。洛中がその始末であるから、羅生門の修理などは、元より誰も捨てて顧る者がなかった。するとその荒れ果てたのをよい事にして、狐狸（こり）が棲（す）む。盗人（ぬすびと）が棲む。とうとうしまいには、引取り手のない死人を、この門へ持って来て、棄てて行くと云う習慣さえ出来た。そこで、日の目が見えなくなると、誰でも気味を悪るがって、この門の近所へは足ぶみをしない事になってしまったのである。

その代りまた鴉（からす）がどこからか、たくさん集って来た。昼間見ると、その鴉が何羽となく輪を描いて、高い鴟尾（しび）のまわりを啼きながら、飛びまわっている。ことに門の上

の空が、夕焼けであかくなる時には、それが胡麻（ごま）をまいたようにはっきり見えた。鴉は、勿論、門の上にある死人の肉を、啄（ついば）みに来るのである。—— もっとも今日は、刻限（こくげん）が遅いせいか、一羽も見えない。ただ、所々、崩れかかった、そうしてその崩れ目に長い草のはえた石段の上に、鴉の糞（ふん）が、点々と白くこびりついているのが見える。下人は七段ある石段の一番上の段に、洗いざらした紺の襖（あお）の尻を据えて、右の頬に出来た、大きな面皰（にきび）を気にしながら、ぼんやり、雨のふるのを眺めていた。

## 1.1. テスト

作者はさっき、「下人が雨やみを待っていた」と書いた。しかし、下人は雨がやんでも、格別どうしようと云う当てはない。ふだんなら、勿論、主人の家へ帰る可き筈である。所がその主人からは、四五日前に暇を出された。前にも書いたように、当時京都の町は一通りならず衰微（すいび）していた。今この下人が、永年、使われていた主人から、暇を出されたのも、実はこの衰微の小さな余波にほかならない。だから「下人が雨やみを待っていた」と云うよりも「雨にふりこめられた下人が、行き所がなく、途方にくれていた」と云う方が、適当である。その上、今日の空模様も少からず、この平安朝の下人の Sentimentalisme に影響した。申（さる）の刻（こく）下（さが）りからふり出した雨は、いまだに上るけしきがない。そこで、下人は、何をおいても差当り明日（あす）の暮しをどうにかしようとして—— 云わばどうにもならない事を、どうにかしようとして、とりとめもない考えをたどりながら、さっきから朱雀大路にふる雨の音を、聞くともなく聞いていたのである。

雨は、羅生門をつつんで、遠くから、ざあっと云う音をあつめて来る。夕闇は次第に空を低くして、見上げると、門の屋根が、斜につき

出した藁（いらか）の先に、重たくうす暗い雲を支えている。どうにもならない事を、どうにかするためには、手段を選んでいる連（いとま）はない。選んでいれば、築土（ついじ）の下か、道ばたの土の上で、餓死（うえじに）をするばかりである。そうして、この門の上へ持って来て、犬のように棄てられてしまうばかりである。選ばないとすれば——下人の考えは、何度も同じ道を低徊（ていかい）した揚句（あげく）に、やっとこの局所へ逢着（ほうちゃく）した。しかしこの「すれば」は、いつまでたっても、結局「すれば」であった。下人は、手段を選ばないという事を肯定しながらも、この「すれば」のかたをつけるために、当然、その後に来る可き「盗人（ぬすびと）」になるよりほかに仕方がない」と云う事を、積極的に肯定するだけの、勇気が出ずにいたのである。

下人は、大きな嚏（くさめ）をして、それから、大儀（たいぎ）そうに立上った。夕冷えのする京都は、もう火桶（ひおけ）が欲しいほどの寒さである。風は門の柱と柱との間を、夕闇と共に遠慮なく、吹きぬける。丹塗（にぬり）の柱にとまっていた蟋蟀（きりぎりす）も、もうどこかへ行ってしまった。

下人は、頸（くび）をちぢめながら、山吹（やまぶき）の汗衫（かぎみ）に重ねた、紺の襖（あお）の肩を高くして門のまわりを見まわした。雨風の患（うれえ）のない、人目にかかる惧（おそれ）のない、一晚楽にねられそうな所があれば、そこでともかくも、夜を明かそうと思ったからである。すると、幸い門の上の楼へ上る、幅の広い、これも丹を塗った梯子（はしご）が眼についた。上なら、人がいたにしても、どうせ死人ばかりである。下人はそこで、腰にさげた聖柄（ひじりづか）の太刀（たち）が鞘走（さやばし）らないように気をつけながら、藁草履（わらぞうり）をはいた足を、その梯子の一番下の段へふみかけた。

それから、何分かの後である。羅生門の楼の上へ出る、幅の広い梯子の中段に、一人の男が、猫のように身をちぢめて、息を殺しながら、上の容子（ようす）を窺っていた。楼の上からさす火の光が、かすかに、その男の右の頬をぬらしている。短い鬚の中に、赤く膿（うみ）を持った面皰（にきび）のある頬である。下人は、始めから、この上にいる者は、死人ばかりだと高を括（くく）っていた。それが、梯子を二三段上って見ると、上では誰か火をとぼして、しかもその火をそこここと動かしているらしい。これは、その濁った、黄いろい光が、隅々に蜘蛛（くも）の巣をかけた天井裏に、揺れながら映ったので、すぐにそれと知れたのである。この雨の夜に、この羅生門の上で、火をともしているからは、どうせただの者ではない。

下人は、守宮（やもり）のように足音をぬすんで、やっと急な梯子を、一番上の段まで這うようにして上りつめた。そうして体を出来るだけ、平（たいら）にしなげ、頸を出来るだけ、前へ出して、恐る恐る、楼の内を覗（のぞ）いて見た。